

震災は生命倫理学の土台を揺るがしたか？

森下直貴 浜松医科大学

今回の震災と原発事故からすでに9ヶ月が過ぎた。しかし、私の脳裏にいまなおびりついて離れない映像が三つある。

一つめは、宮城県南三陸町の役場の建物の連続写真である。そこには、屋上で様子を見ている人々が津波に飲み込まれ、わずか数人だけが必死にしがみついている様子が冷厳なまでに写されている。津波の圧倒的な威力にはもはや息を飲むしかない。

二つめは、崩れた積み木のようにひっくり返った車という車を見つけては、そこに夫がいないかと捜し回る若い妻の映像である。少し離れて心配顔の父親が付き添っているが、その若妻の表情には一種の狂気めいたものが漂っている。

三つめは、過去の戦時の映像に重なる奇妙な既視感である。震災後の荒涼たる町の光景や、テレビにかじりつく人々の緊張した面持ちから、私は直ちに、空襲と原爆投下後の焼け野原の風景や、開戦時に国民が懐いた集団的一体感を想像せずにはいられなかった。もとより戦争と災害とを同列におくべきではないだろうが、それが偽らざる私の印象であった。

私個人の感想を離れて各種の調査結果に注目しよう。日本人の意識は震災後に大きく変わってしまい、その変化を大きく分けるなら次の二つの方面で顕著であるという。

一つは、安心・安全の再認識であり、これと関連する自然の複眼的な見方である(全世界に広がった反原発の動きにここでは言及しない)。人間の思惑やリスク計算をはるかに越える自然の破壊力に関する知識と、実際の体験との間には天と地の開きがある。「天災」という言葉には、たんに管理するだけの自然から、ただひたすら慰撫するだけの自然まで、とてつもない振幅が抱え込まれている。千年単位の大地

の振動を前にして私たちは、管理と慰撫との両立という一筋縄ではない課題に直面している。

もう一つは、家族であることの重みであり、それとの関連で「社会的つながり」への関心である。婚活市場に変化が生じ、家族との時間を大切に考える人が増えている。また、とくに若者の間で社会参加の意欲が広がっているが、社会的貢献を通じた自己実現という志向は、若者に限らず中高年世代でも高まっている。ただし、若者の社会参加の方はじつは1990年代のバブル崩壊以降から急上昇し、その後もずっと持続している。低成長時代における仕事とくに経済活動と社会的貢献との両立は積年の課題である。

国民の意識の変化を受けて、学問の土台は震災後(そして原発事故後)一変したと声高に叫ぶ人がけっこう多くいる。社会との関連や実践を標榜する生命倫理学ならなおさらだ、と感じる研究者も少なくないだろう。ポスト3.11というわけである。しかし、はたしてそうであろうか。あえて率直な物言いをすれば、その種の論者の想定する元々の学問の土台が狭いか、表面の揺れ動きと基本構造とを混同しているのではないか。

私に関するかぎり、震災・原発事故によって生命倫理学の土台はまったく揺るがない。なぜなら、私にとって「生命倫理」とは、通常のバイオエシックスとは異なり、そもそも環境と連動する「生命」をめぐる倫理だからである。そしてすでに1980年代以降、ポストモダン化・グローバル化・デジタル化という荒波によって、文化と生活をはじめとして、政治と経済、テクノロジーとメディアにまでおよぶ全面的な地滑りが起こり、それがそれまでの生命倫理の枠組みを決定的に変容させていると見るのだが、その詳述は別の機会にゆだねよう。